

# クライムトリガー

百合の間に男を挟む  $\alpha$

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

地球生まれ日本育ち玄界暮らし、名をクライム。

聰明であった。現実を理解した。学問に励んだ。肉体も鍛えた。しかし、ただ一つ。ただ一つだけ足りないものがあった。

満たされない欲求、満たしきれない現実。それでも適応しようと諦観を抱いた日々。

その果てに至った場所で、青年は何を願うのか。

アフトクラトル①  
アフトクラトル②  
アフトクラトル③  
アフトクラトル④  
アフトクラトル⑤

44 37 27 21 9 1

百合と共に①

目  
次

## アフトクラトル①

幼い頃から抑えられない、どうしようもない衝動。

他者が苦しむ姿が美しく、他者が傷つく姿が愛おしく。

特に異性が悶える様は素晴らしい。あれ以上に興奮の最中に絶頂できる要素はない。

僕は人道から外れている。

どうしようもない程に根底が狂っているんだ。でもしようがないよね、そういう風に生まれたんだから。

命の誕生に感動を覚える。

生命の神秘は不思議と感嘆を示してしまわないか？

それと似たようなものだ。

他者の嫌がる声が大好きだ。

他者の苦しむ声が大好きだ。

動物の死に絶える瞬間、あの刹那にちりばめられた全ての行動に意味を見出して勝手に興奮を覚えてしまう。蟲が死ぬ呆気なき、そこには籠められた生物の本能の意味。

ああ、素晴らしい。

とまあ、思春期も真っ青な自己紹介を終えた訳だが。

だからといって僕は犯罪者ではない。

なぜなら、明確に定められた憲法に従つて生きているからだ。人間は殺さず傷つけず、動物だつて慈しんでいる。蟲はまあ、蚊くらいは殺すけど。

人間社会を理解し、僕は異常なんだと把握した。

だから、ひたすら常識の中に身を置いた。

自分の悪を理解し、暴走しないように適度に潤した。

スプラッタホラーな映画を鑑賞して嗤い、ダークウェブに流出するような動画も漁りつくした。両親は共働きで忙しかつたのもあるだろう、それはもう限度を以て好き勝手した。

虐待動画が出回るたびに興奮した。

殺人現場を覗き見て、風景を想像して愉しむ。

屑で外道だが、僕は一切法を犯さなかつた。

習い事もやつた。

物心ついた頃に興味を持ったフリをして、合法的に他者を痛めつける格闘技に目を付けた。

幸いというべきか、僕は才能が有つた。

小学校低学年にして年齢差二倍の相手に勝てた。

人体の壊し方を学んだ。治し方も学んだし、なにより自分に苦しみが混ざるのも心地よかつた。

一撃頬に強烈な一撃を浴びた途端脳が信号を発するのだ。

『相手を殺せ』、『殺す氣でいけ』、『まだまだやれる』。

僕のイカれた脳内が願う反応はどれもそうだ。根拠なき自身と自己肯定によつて深く沈み込んだ自我は訴えかけてくる。相手が倒れるまで、自分の身体が碎けるのも厭わず殴り続けた。

拳の碎ける感覚、皮膚が千切れ血が流れる刺激。肉と肉がぶつかつて弾けるあの感覚は忘れようもない幸福だつた。

醜悪極まるモノで申し訳ない事に、僕は自他問わず被虐・嗜虐的であるらしい。

脳内物質の高揚感に身を任せ血の昂ぶりに全てを委ねる。

安全が保障された現代において命のリスクを試す方法は幾らでもあるが、僕はこの世界が好きになつた。

殴つても犯罪にならない世界がある。

蹴つても犯罪にならない世界がある。

——じやあ、殺しても犯罪にならない世界があるんじやないか？

齡十八歳。

僕が高校を卒業し、幾人もの人間を破壊した末に出した結論だつた。

そしてそれは、存在した。

「……ん」

随分と懐かしい想い出だ。

現代社会、なんていい響きだろうか。人の努力の結晶であり先人の犠牲の果てであり、人類の抱える探求心の最先端。

僕は幸運だ。

なんでもある世界に生まれたのだから。それを知る事の出来る教育を受けたのだから。

これを幸せと言わず何という？ 自分を満たせる何かを僕は常に享受できるんだ。

「あら、起きたの」

「ん、おはよう。懐かしい夢を見てね」

コトリ、と僕の前に置かれるカツプ。

どうやら彼女が持つてきてくれたらしい。感謝を告げながら一口、黒い液体から香る落ち着く効能をプラスチーボで増幅しつつ感情を落ち着かせた。

「僕がまだ向こうに居た頃の話だ。君には僕の歪んだ性根は言つただろう？」

「ええ、この国でも有数の人格破綻者なのは理解してるわ」

「ふふふ、酷いな。僕は常識を兼ね揃えているから破綻してると訳じや無いよ？ ちょっと方向性が違うだけで」

「負の方向性に向いた癖は正常ではないでしょ？ だから破綻でいいのよ」

やれやれ、ああいえばこういう。

僕は彼女との手の問答で押し勝ったことが無い。それでもいいのだ、何故なら楽しいから。嗜好は違えど、僕は論理的でもあり感情的でもある矛盾した性質を持っている。

無駄な雑学も効率的な知識もどちらも好むのだ。

「じゃあ認めよう。人格破綻者の僕が向こうで暮らしていた時の記録に近いモノを見た」

「……良かつたじやない。まだ馴染んでないんでしょうから、そういう事もあるわ」

「いやあ、あの話受けてよかつたと思うよ。僕にとつてここは天国で、天職で、素晴らしい花園だ。思わず誓いを立てたくなる程度にはね」

現代社会、僕はあの歯車として育てられた。

その恩はある。社会の一員として次世代を育む、そういう気力はあつた。成人する前の子供で居られる期間にて自分を理解できたのだから、後は現実と折り合いをつけるだけだった。

でもそうはならなかつた。

寸前で見てしまつたんだ。襲撃の全て、蹂躪の快楽、殺人の興奮。この手で人を殺めるその刹那の絶頂を、僕はこの手で味わつてしまつた。

もう戻れない。

戻る気も無い。

「気がかりは残つてるけど、それはそれ。僕の人生なんだから精々好きに生きさせてもらうのさ」

両親はどうなつただろうか。あの襲撃で死んでしまつたのかな。隣の家に住んでいた幼馴染はどうしてるだろう。今頃生きていれば高校生？いや、大学生くらいか。人間の成長を見届けるのも一つ楽しみではあつたけれど、それは此処でも見る事が出来る。

「新しい芽は着々と伸びてる。この星も未だ安泰——暫くは楽を出来そうだ」

「そうね。貴方が遠征兼教導に努めてくれるお陰で正規戦闘員が強くなつてゐる。それは隊長も、誰もが認めている功績。……正しい意味で、戦場の恐怖を叩き込んでくれるお陰でね」

「あれ？ 今褒める感じだつたよね？」

「褒めてるわ、貶めてもいるけど」

ならない。

彼女が煎れてくれた飲料を飲み終えて、背凭れにゆつくり傾掛かる。

「——ねえクライム」

「なんだいミラ」

額の端から小さな角を生やし、ワインレッドの髪を肩口で切り揃えた女性——ミラ。

「あなたは私を殺す？」

「いや、殺さない。死ぬほど殺したいけど、僕は君を殺さないよ」

座るソファに腕を組んで凭れ掛かってくる。

僕は首を少し動かして、彼女と至近距離で見詰め合いながら問答を繰り返した。

「少しずつ、ちよつとずつ。僕は正常になってるんだ。君は美しく、そのままであつて欲しいと願う時がある」

「私も、あなたはそのまでいて欲しいと願う時があるわ。狂つたままで、おかしい今まで、何時までも狂気に浸つているあなたで」

「人が折角人間になろうとしてるのにそれを否定するのかい？」

「そうね。私が見惚れたあなたは狂っていたんですもの。狂つてる人間に惚れたなら、狂つた今まで居て欲しい。そう願うのは自然ではなくて？」

スス、と僕の顎先から頬にかけて撫でるミラの指先。

「君も大概おかしい奴だ」

「あなたが変えたのよ、変な女にね」

まるで僕が悪者じゃないか。僕は法に触れる事は何もやつてないと言うのに。

「これで傷の一つでも残つていれば無理矢理にでもしてあげたのに」

「おお、怖い怖い。女性の執念は恐ろしいね」

降参だ、笑いながら彼女の手を撫でた。

「よかつたよ、あの日あの時君を傷つけなくて」

嘘偽りない本音だ。あの時傷をつけていれば、今の景色は無い。

この日常を溜めて貯めて、その果てにある絶望こそが僕の興奮に繋がるのだから。

きっと彼女も全てを理解して話している。

僕は一ミリだつてブレてない。一寸だつて変わつてない。心の根底に存在する醜悪な本音が今か今かと鳴りを潜めているだけなのだ。

そのうえで彼女は僕と話す。異常者と見極めた果てに僕たちに絆は生まれた。

いつかきっと、この手で彼女を傷つけるその日が来るまでは。

「ああ、そうだ。次の遠征先はどうだつけ」

「乱星が三つ、二週間後に来るそうよ。試乗にはちょうどいい試験場ね」

くしやりと僕の髪を搔くミラ。

その指先が柔らかく触れる感覚の後に、未だ慣れる事はない感覚へと変わる。

小さく、それでいてしつかりと根付いた硬質な物体。

僕の額の両端から捻れるように生え備わった角は生まれた時からあるような、それでいて新たな旅路に旅立つた時の空白感に似ている。

「こういう技術体系、そそられるよ。謎が詰まつていてまだまだ未知の塊、僕の探求心が疼くんだ」

もつと取り込め。

もつと深く沈め。

謎を解明しろ。

不思議を亡くせ。

神を墜とせ。

つまるところ、未知を過ぎ全知になれと告げてくる。

「本当に、難儀な人ね。何もかも満たされる事のない欲求、欲望」「満たされてはいるさ。乾かない程度にね」

海の水が満ちず、枯れないように。

潮の満ち引きで左右されるような量ではない。僕は大海には劣つても湖程度の深さは持つていて。それを常に自分で制御しているにすぎない。

「トリオン体の調整にも手を出したい。今ままじやちょっと、ツマンナイからね」

「……あんまり派手にやらないように。ヴィザ翁に怒られるわよ」「納得してもらうさ、僕は合理を好むからね」

「それ以上に嗜好を優先するでしょう」

よく理解している。

流石は僕が愛殺したせると思つた女性だ。

「せめて痛みがなきやね。何も感じない殺し合いなんてつまんないよ」

遊戯とかわりやしない。

遊戯で欲求が満たせるのならそれでいいけど、僕はそれじゃ満足できないからね。

「う、ふふ。想像するだけで楽しみだなあ」

トリオンが漏れる感覚は何で代用しようか。

血液の流れる感覚かな？

内臓が飛び出るような刺激でもいい。適当に捉えた捕虜の脳反応を繋いで、データとして保存して、それを僕のトリオン体に組み込むだけ。仕組みは幾らでも仕込めるから楽しみでしそうがない。

手足の欠損が狂おしい程待ち遠しい。首が離れる感覚はどう言い表せばいいのだろうか？

あの虚空へと落ちていくような虚無感、刹那に沸き上がる後悔や屈辱の混じった憤怒。

「——悪い顔、でも……やつぱりあなたはそう在るのがいい」

「君は本当に僕を肯定してくれる。社会と正反対な人だね」

面白い皮肉だ。

女性進出を願う社会はきっと僕のような狂人を許しはしない。罰をこじ付け罪を擦り付け、ありとあらゆる手段を用いて封をするだろう。

それをしないこの国と、彼女のような存在。

「愛は時として世界を超えるのよ」

「そもそもそうだ。そうじやなきや、僕はここに居ない」

彼女が顔を近づけてくる。

軽く触れあうだけの、形だけの接吻。けれど僕たちにとつてはこの程度で十分だつた。

肉体同士での交わりより、生物としての本能よりも理性での興奮を

選ぶ。

「——愛してるわ、クラインム」

「僕もさ、ミラ」

小さな小さな重なりでいい。

いずれ離れるその日まで、僕らで紡いでいけば良いんだ。

## アフトクラトル②

春が過ぎ、夏に突入した頃。

日課である筋トレを行つてゐる僕を訪ねてきた幼馴染と話した事がある。

「——勉強に飽きたわ」

彼女は器用だつた。

僕もそれなりに何でもできる自負はあつたが、それに付随する程度には彼女は出来た。

脳を動かす知識的な試験も、身体を動かすスポーツもそれなり以上に熟す。勿論習熟度に差はあれど、全体で見れば高い水準を満たしていた。

来年度には僕がいる高校に進学していく——筈だが。

「そりやまた……まだまだこれから。高校の勉強は退屈では無いよ？」

「科目が増えるのは知つてゐるけど別に楽しみじゃないのよ。ただ、進学したから何があるのかわからぬのよね？」

将来の不透明さに不安を抱いている訳では無さそうだ。

僕もそこそこ不安ではあるけどそこは覚悟している。今の社会の情勢とかそういう事に興味がある訳では無いが。考へるのは良い。考へている間は自分を失つていられるんだ。

「学ぶ事に意義があるんじやなく、学ぶ事そのものに意味があるんじゃないかな？」

「わかりづらい例えね。魚を与えるか獲る方法を教えるかつて事？」

「そういう事。数学を勉強するのは必要な事だから、でも将来的に必ず深い数学の知識を使うとは限らない。でも、使わないことはない」四則計算はどんな世界に飛び込んでも存在する絶対のルールだ。

金銭を管理するため、定められた。

しかし時代は進み、変化していく。

「その時に『学び方』を知らないと、何も出来ないよね」

「……そうね。納得したわ」

「それはよかつた」

窓を開けて、わずかに入る風を楽しむ。

夜特有の空気感が心地よく、それは彼女も感じていたのか何も言うことはなかつた。

「それはよかつた」

◇  
「—— オイ、起きろやクソ野郎」

目覚めの一聲で罵られ、ゆっくり意識が覚醒する。

なるほど、角を外部品として取り付けるとこう言う副作用が存在するのか。これは興味深い結果が出せそうだ。

「やあエネドラ、今日も『機嫌ななめだね』

「チツ、氣色悪い」

黒い角が額から一本生えた前髪アシメの男性、エネドラ。

素行の悪さはピカイチで差別的な発言が後を絶たない過激な気性を持つ。僕のことを異常なまでに嫌つていて侮辱してくる。

それはそれで楽しいからいいけどね。

「最近は夢をよく見るんだ。これを付けてからね」

自分の額から生えた角を指差す。

エネドラやミラとは違つて白い色が目立つが、黒い髪の毛と白い角だから組み合わせとしては綺麗だろう。

「君は記憶の混濁とかある？」

「ねえよんなんもん、イカレサイコと一緒にすんな」

「ひどいなあ、全く。僕だつて罵倒してくれる人は選びたいんだよ?」

「こつちは話したくて話してる訳じゃねーんだよ!」

扱いの酷さに興奮してきた。

僕はエネドラに対しても害を与えたことはないが、きっと本能的に彼は拒否しているんだろう。本質を捉えて根幹を嗅ぎ分けるその嗅覚は素晴らしい。

「施術の記録は残してある。無駄に手を加えた様子はなかつたから脳

を弄られたつてことはないだろうけど、君たちに比べれば研修に近い形で行われたのは事実さ」

僕が望んで行つた事ではあるが、手術を受ける無防備な様を他人に見られるのは結構恥ずかしい。

何度も繰り返し確認したから余計目に焼き付いてる。

「やつぱり玄界の科学知識が欲しいなあ……」

「ケツ、どうせ数年したら猿狩りがあるだろうがよ」

「いやー、ちょっと観光させてもらえないかな。どう言う風に変わったのか知りたいからさ」

数年後、僕は故郷を襲撃する。

これは確定事項であり、揺るがない事実だ。

そこに思う事がないわけではない。

倫理的にとか、正しい正しくないの二元論ではね。

でもどうでもいい。強いて言うならばちよつと様子だけ見たいな、とは思つてゐる。

「玄界の文明は素晴らしいよ？ 本当に、近界より発展の差が大きい」  
それは文化であり科学であり、トリオン技術に頼つて発展してきた  
こことは違う歴史を持つ。

「トリオン技術はまだまだかもしれないけど、あそこはすぐに成長する。必ずね」

「はつ、な訳ねーだろ。どんだけやつたところで俺達には勝てねえ」  
「成長速度は個人差がある。君が子供の頃から戦闘を重ね、トリオン  
体による戦いに慣れているのはわかるけど——さてさて、どうなるかな」

僕は器用ではあつた。

でも別に天才ではなかつた。

異常ではあつたが、それを捉える事ができた程度の凡夫である。なんでも熟せた訳じやない。なんだつてひたすら反復の繰り返しだつた。

割り切りと忍耐。

僕が他人より優れていたのはこの二つだろう。

「現に僕は二年ちょっとで此処まで来た。まだまだ頭打ちじゃない、伸び代しかないさ。君を追い抜くのも近いかもね」

「舐めんなザコが。強化トリガーと角生やした程度で俺に勝てる訳ねえだろ」

「それは相性次第さ。君専門の対策を練れるのも強化トリガーの強みだろう?」

そんな風にエネドラと会話を続けながら待つ事五分程度、僕が寝ていた原因とも言える男がやつてくる。

「いや、急に呼び出してすまんな」

「気にしないで、エネドラと交友を深めていたところだから」

「そうか、それはよかつた。馴染めるか心配していたが全く問題なさそうだな!」

「誰が誰と交友深めてるだつてクソ野郎が死ね!」

事実を述べただけでこの罵倒である。やれやれ、ゾクゾクしちゃうね。

「…………氣色悪い」

「ガチの声はやめてくれないか? 僕も傷つく」

そして悦ぶ。

「はつはつは、水と油だな!」

「それ絶望的に合つてないよね。火に油の方がマシだよ」

思わず顔に出ていたようで、多分それがエネドラインに引っ掛けたんだろう。(エネドラインの感情的限界ラインを指す)

まいづたな、悦びを隠さなくていい環境に慣れてしまったから難しい。

「努力するよ」

「早く死ね」

売り言葉に買い言葉というより一方的な拒絶である。

ああ、かつて故郷で本性を隠し続けてよかつた。こんな目に遭つてたら絶対耐えられなかつた。悦びを抑えきれない的な意味で。

「それで——ランバネイン。僕らに何の用かな?」

このままでは埒が開かないでの、ひとまず呼ばれた要件を聞く事に

する。

男の名前はランバネイン、僕の主人である領主の弟——つまりお偉いさんである。本来ならこんなフランクに言つていいい人間じやないんだけど、この星の連中はそこら辺適當だ。年功序列は存在しているが、それ以上に立場上の権力の方が上。

「ああ、次の遠征の話だ。調査の結果が出たからな」

「んなもん無くたつて余裕だろうが。所詮ザコの集まりだ」

「それで、どんな中身だつた？」

エネドラに喋らせると永遠に文句と罵倒を繰り返す羽目になるので、此処は一つ本題に軌道修正する。

僅か数ヶ月の付き合いだが既に慣れてきた。

それが正しいのか悲しいのか。

「うむ——端的に言つてしまえば、弱い！」

「言つてんじやねーかよ、ザコだつて」

「弱いつて言つても種類があるじやないか。そこを教えて欲しい」

弱い。

言葉で表すと簡単だが、その意味合いは広い。辞書には載つてない、現代ならでは。

「戦力が弱い。トリガーが弱い。国力も弱い」

「ふーむ……ああ、なるほど。だから僕達二人なのかな」

察しがついた。

要するに僕とエネドラ、そしてランバネインの三人で遠征を行えといふことか。

「実験台にされる程に弱いのにうちの近くを通らなきやいけないのは同情するね」

角との適合実験——簡単に言うと、今回の遠征の目的はそれにある。

アフトクラトルでは幼い頃にトリオンを成長促進させる効果を持つ角を埋め込むんだが、今回特例として成人している僕に取り付けた。

これによつてどんなデータの変化が出るか、実戦で確かめたいと言

う事だろう。

「僕のトリガーは」

「既に角との同期が済んでいる。後付けだと角そのものに仕様をつけるのは便利だな」

「オッケー、エネドラ後で模擬戦付き合つてよ」

「そのまま殺していいならやるぞ」

「構わないよ。どうせ死ないし」

僕のトリガーは特別性だ。

味方との連携をした上でソロでの戦いが向いている矛盾。切り込み隊長ではなく、なんと言うか……対人間、そこに重きを置いている。

「君じゃ僕は殺せないよ」

「……上等じやねえか、本気で殺しに行くぞ」

舐められたと判断したのか、エネドラは額に青筋を浮かべる。

そこから滲んでくる本気の殺意に、つい身震いしてしまう。ああ、この後どれほどの刺激が待っているのだろう。一体どれだけ受け止め切れるだろうか。

「——それはそれは、愉しみだ……！」

思わず口角が吊り上がる。

嗤いが抑えきれない。

早く早くと本能が急かしてくる。

実に久しぶりだ、この国に来る前に殺し合つた以来だから——数ヶ月ぶりの全力戦闘。

「——後悔なんざさせねえ！　速攻でぶち殺してやる！」

「——さあ、存分に翻つてくれ！　僕を満たしてくれ、君の本氣で！」

——トリガーオン。

「泥の王！」  
〔ボルボロス  
アリシダ〕  
「罪の鎖！」

溢れ出したエネドラのボルボロスから距離をとり、そのまま外へと飛び出した。

流石に室内で殺し合いをするのはランバネインに申し訳ない。彼がトリオン体なのは認識していたが、仮にも偉い人間の目の前で殺し

合いを展開するわけにもいかないだろう。

僕は倫理観が欠如しているけど、常識は持つてたからね。

「どこの行きやがるクソ猿が——！」

「差別意識が出てるよ、エネドラ！」

流体と固体の境目を反復横跳びしながらボルボロスが襲い掛かってくる。

両腕から鎖を射出し、反動をつけて前に移動する。

速度自体は僕の方が上、範囲はあちらが上。

僕のトリガー、罪の鎖アリシダは強化トリガーと呼ばれるアフトクラトルの最新トリガードだ。

対人において、『確実に負けはない』と言うコンセプトをもとに作られたらしい。そこにチヨチヨイと細工をして僕好みに変更した。エネドラが使用しているのは黒トリガー泥ボルボロスの王。

強化トリガードとは違い、トリオン能力に優れた人間が命を捨てて作り出すことができる唯一無二の武器である。その性能は根本的に凄まじく、並のトリガードはいくら数を揃えたところでボルボロスには勝つことはできない。

市街地で戦闘は避けるために、一応町外れの方まで高く跳ぶ。

鎖での移動にも大分慣れてきた。

射出の感覚、重力から外れる瞬間。かかる負荷、それらが身に染み付いてきた。

周りが草原になつた辺りを目標に鎖を一刺し、そのままグルリと弧を描くように飛んでいく。

後ろを見ればしつかりとついてきているエネドラ。殺意に身を任せているとは言え、流石に市民を手にかけるつもりは無いらしい。まあ罰則とか言わされて反抗しても、ね。

「さて、どうする……」

確認したいことは無数にあるが、一つずつ纏めて行こう。

先ずは実戦におけるトリオン量の変化。

僕が保有するトリオンは大まかな数値で表せば10。これはかなり高い方で、かつて身を置いていた国でも重宝されていた。三回程度

までなら連戦可能なトリオン量である。

今の僕は角による拡張機能で少なくとも5は増加していると見ている。

完全に馴染んでいるエネドラとかミラに比べると微々たるものだが、それはこれからに期待する。

鎖は先端部分が鎌のようになつており、突き刺さると抜けづらい性質を持つ。

突き刺してその分だけ切り離して再生成して、と言うやり方で補充している訳だが——トリオンにはまだまだ余裕がある。

「閉所なら陣地形成とか出来るんだけど、草原だからなあ」

相手の情報を知っているからこそ模擬戦である。

初見相手にもどれだけ引き出しを作成できるか、それが目的。エネドラは僕を殺したいようだけど、僕は殺したい訳じゃない。こんなどうでもいいことで殺すなんて勿体無いだろう？

「シンプルに近接戦で行こうか」

決めた。

空中から落ちてきたエネドラは息つく暇も無く攻撃を放つてくる。スライムのようにドロドロと、それでいて水のようにぬるりと緩慢な動きをしていた液状の物質が固体になる。

この操作もなかなかに緻密な作業が要されるのだが、流石はエネドラ。

先端部分だけ硬質化して、後は流体。

鎖を部分的に展開して両手足に巻き付け防具のような扱いにする。攻撃が来る順番を数え、それに向かつて対処する。

一体一は余程の実力差がない限り理論が通用する。理詰ほど戦闘を表しているものはない。

一本捌く。

二本に増える、それも捌く。

三本に増える、受け流す。

感触が鎖ごしに伝わり、流しきれなかつた分の運動エネルギーは僕の体に流れてくる。

その物理法則に従うように反転、エネドラへと掌底を放つ。

「——チツ」

大きく後ろに下がるエネドラ。

流石に情報を知られていて嫌がるよね、そうだよね。

「悲しいなあ、ミラは受け入れてくれたのに」

「強制的にやつたんだろうが」

鎖を射出し、勢いを殺さないまま振りまわす。

最大限の威力で当たるようにエネドラに振るうが、ボルボロスの汎用性は流石と言うべきか。

横薙ぎに見えて反対から挟み込むように当てたのに、そこもカバーされる。

「残念、もうちょっとだつたのに」

「俺に触れることはねえよ、カスが」

大きく広げるよう、それでいて逃げ道を塞ぐようにボルボロスが這つてくる。

正直なところ、ここは鎖で逃げるのが最善手だ。

アリシダとボルボロス、互いに相性が良いようで悪い。

僕は決定打に欠け、ボルボロスは火力で押し切ろうにも速度が足りない。逃げ性能もそれなりに評価されているアリシダ相手じゃ、速度が遅すぎる。それを覆す手段もあるにはあるけど、エネドラはやつてこないだろう。

「——でも、それじゃあつまんないよね」

正面から、拳を持つて。

たとえ肉が裂け骨が碎け血が流れたとしても、僕はそれを受け入れる。そのためにトリオン体にも細工をしたし、勝つための戦いじゃないのなら好き勝手やるさ。

「行くよアリシダ、我慢してね」

斜めに突き刺さるように鎖を射出し、巻き取る。

ジャラララ！ と音を鳴らしながら渦巻くボルボロスへと突撃していく。

無論いろんな方向からボルボロスの攻撃が飛んでくる訳だが、身を捩り鎖を射出し空中での自分の制御を必死に行う。

時々僕の身体に傷をつけていく攻撃があつて、それがまた刺激的で堪らなくて興奮する。

そうだ、これだ。

この戦いの緊張感。

故郷では絶対に得ることのできなかつた、受け止めきれないほどの多幸感。

僕の苦しみ、相手の感情。

全部僕にとつては喜びになるのだ。

「——く、ははは！」

笑う。

ついつい口から漏れてしまう。

痛みで麻痺する脳味噌、取り繕う思考回路。ガンガン回せ、エネルギーを全て使いきれ。

生きているとはこう言うことだ。意味のないことをするだけ、息をして水を飲み飯を食うだけのことを生きているとは言えない。他人がどうかは知らない、少なくとも僕にとつては死と同じ意義だ。エネドラの目の前にたどり着き、その時点です全身が訴えてくる痛みに堪えながらも蹴りを放つ。

放ちながら、足先から射出した鎖で絡めとることも視野に入れる。興奮と冷静を常に繰り返す。精神安定なんて知ったことか。  
脳内麻薬が多分に分泌される。

「——ツツたあツ!?」

左腕から奔る激痛に喜色を滲ませつつ、エネドラに鎖が巻きついたのを確認する。

アリシダが効果を發揮するより先に殺し切れると判断したか？  
いくら黒トリガーとは言え、それは舐めすぎだ。

「——ふううううう……」

一度飛び退いて、息を吐く。

危ない危ない、目的は達成したから状況を整えよう。

「いやあ、参ったね。あまりにも切断の痛みが激しすぎてつい興奮しちやつたよ。ね——アリシダ」

一言呟き、未だ警戒を止めないエネドラの表情が変化するのを目視する。

「がツ……！」

「う、はは、あははは！ そうそれ！ それだよエネドラ！」

アリシダが『対人戦闘において負けない』と言うコンセプトの所以——これだ。

鎌を刺した他人のトリオン体の規格に干渉できる。

流石に大きさとか強度とかそういうのは弄れないけど、ちょっとした痛覚設定程度なら弄れる。

離れておらず、直接繋がっているのなら自由に。

既に鎌と鎖が独立している場合は事前設定が適応される。

僕が今回設定したのは、痛みの共有。

「最高のトリガード！ 僕の知識と、アフトクラトルの技術の叡智！」

トリオン体の規格に差は大きく存在しない。

それを逆手にとったトリガード。

「それが左腕が千切れた痛みで——これは、人差し指が折れる感覚だ」右手を見せつけるように目前に出して、親指で人差し指をへし折る。

トリオン体だから実際に折れてるわけじゃないけど、それでも視覚情報では確かに折れている。

骨が折れた時特有の熱と痛みが襲ってきて、広角が再度吊り上がる。

「はああああ……本当に、この国に来てよかつた」

恍惚とした表情を隠す気も起きない。

自分を偽る必要は一切ないから。この世界はトリオンが全てだ。どれだけ陰湿でどれだけ性悪だったとしても、トリオンさえ高ければなんともなる。

「クソイ力れ野郎が——！」

「人の趣味を否定するのは良くないなあ！」

左腕の断面から鎖を射出し、断面がぐずぐづに痛めつけられる感覚が入る。

エネドラにそれが共有されたのか、顔を顰めて即座に流体化した。「なるほど、それは便利だ！」

流体化すれば同一部位だったとしても共有できない。

やはり経験値の高さは侮れない、今までは負けない戦いができる。もつと選択肢を増やして、もつと強敵と戦うべきだ。

「エネドラ！」

叫びながら鎖を射出、肉薄する。

近接格闘に関しては僕の方が上だ。

エネドラも理解しているのだろう、攻撃を出しながら下がろうとするが——それはさせない。

自らの膝部分を殴り壊して、エネドラが動きを止める。

過剰分泌されたアドレナリンが興奮と快樂を与えるのを認識しつつ、鎖をエネドラの頭部目掛けて射出した。

「僕たちは——まだまだ強くなれる！」

頭部に鎌が刺さるより先に流体に変化した。全身を一瞬にして流体に変化させたエネドラは、そのまま硬質化した攻撃を放つてくる。

腕を、足を、胴を、頭蓋を。

一分の躊躇いもなくトリオン体に突き刺さった攻撃と、それと同時に襲いかかってくる例えることのできない激痛。

死ぬとは、こう言うことか。

痛みと苦しみの中で受け入れる終わり——今がその時ではないけれど、これは……抗い用のない快楽かもしれない。

興奮と絶頂の中で、過剰に増幅された感情に包まれて僕は気を失った。

## アフトクラトル③

「——それで、何か言いたいことは？」

「特には。領主特権で取り消したりとかしてくれない？」

「止む無き事情があつたのなら聞き入れる程度の事は配慮するが、今回は出来ない。何故なら、遠征メンバーに支障が発生しているからだ」

「ですよねー」

見逃してはくれないよね、そうだよね。

「……正直頭が痛くなる内容だ。遠征の事前情報を伝えるだけでどうして戦闘になる？」

「いやあ、つい。血が疼いたんですよ、わかりませんか？」「わからぬいな」

我らが領主サマは陰険な人間なので、僕たちみたいな振り切つた異常者の気持ちはわからないと切って捨ててきた。

「これなら僕たちのほうがまだマシだね。何故なら、僕たちは理解できるから。

理解して尚共感せずに自由にしてるだけで。

「以降戦闘が行いたくなつたら申請するように。場所を作るからそこで暴れろ」

「おや、案外寛大ですね。てつきりトリガー奪うとか、そういう罰則あるのかと思つたよ」

「トリオン器官は使用すれば使用する程育つ。君は既に成人を迎えているが、角の事もあり実験体としての意味合いも兼ねていてるからな。暴れること自体は構わない、場所は選べ」

「やだなあ、ちゃんと人がいない場所選んだじやないですか」

「移動くらい我慢しろ」

ごもつともである。

正論は時に暴論になる、今が正にそうじやないか？　そうに違いない。

「はいはい、了解しました。では二時間後には戦闘を行いたいのですい。

が

「…………ミラ、後を頼む」

「わかりました」

溜息と共に吐き出された言葉に、傍らに控えていた女性が応える。

「あまり隊長に苦労かけないでね」

「立場が偉い人間がどうして優遇されてるか知ってるかい？ その分仕事をしないといけないからさ」

「あら、それなら私も仕事をしなきゃいけないわ」

「勘弁してくれ、冗談だ。僕と君の仲だろ？」

くすくす笑うミラに負けだとアピールしつつ、部屋を退出する。

「エネドラはどうだった？」

「強かつたよ。接近戦でエネドラに勝つのは難しそうだ」

相性が絶望的に良くて悪い。

『罪の鎖』<sup>アリシダ  
トリガ</sup>はトリオン体の規格がほぼ統一されている事を利用した武器である。

使用者と相対する者、互いの規格がある程度一致している事を利用した弄れるから通用するのだ。

相手の姿形が違えばただの鎖で殺傷能力は低いし、立ち回り次第で同士討ちとか纏めて無力化とかできる強い武器ではあるんだけど如何せん難しい。

エネドラの泥の王<sup>ボルボロス</sup>のようにせっかく刺しても流体になられるとお手上げである。

「味方に天敵がいるのはいい。幾らでも対策を作つて造つて創つて確かめられるから」

「怒られるわよ？」

「嫌われることで幸福になれるなら本望さ」

エネドラが僕を嫌う。

僕はエネドラを頼る。

合理的に考えれば協力しない手立ては無いので、嫌々付き合つてくれるだろう。

その度に嫌悪の視線や罵倒を浴びせられ、殺意を向けられる。

「なんて素晴らしいんだ……！」

「本当に壊れてるわね」

「でも否定しないだろ？」

「そうね。寧ろ私も楽しみにしてるわ」

それは僕の破滅の瞬間か、それともまた別の意図か。

何によ憶測でしかわからないが、ミラもまた何かを見たいと願っている。ならば僕はその光景を見せられるように努力しようじやないか。

「他人の為に努力するのは気持ちがいいねえ」

ふう、セーブしていこう。

冷静沈着、余裕綽綽。心がけるのは何時だつて冷静な自分だ。最強の自分とかはどうでもいいけど、何時までもこの快楽を享受できる方が楽しい。だから冷静に考えられるようにする。

どれだけ興奮しても根底は変わらない。

怒りに塗れても奥底にある願いを固定する。

「まあでも、僕とミラが組むのが一番相性がいいかな」

ミラは軽いワープが出来るので、鎌を一杯渡してワープでぶつ刺してもらう。

後は僕が自傷しながら戦えば勝ちだ。

唯一欠点があるとすれば僕にも他人の痛みがフィードバックする被虐仕様なので、あまりにも多い人間と接続するとキヤパオーバーの可能性がある事。あの死ぬ間際の感覚、ちゃんと情報化しておいてよかつたよ。

お陰でそつくりとまではいかないけどかなりの再現度だった。

「ふふふ、あ、ヤバい。思い出したら興奮してきた」

「貴方を見るたびに玄界がどういう魔窟だつたのか気になつてくるのよね」

「僕は玄界じゃ大人しい一人の人間だつて言つてるじゃないか。社会的に自分が外れているのを理解して、だから社会に入り込もうとした。入る直前で攫われてこんなにいい場所まで来ちゃつたけどね」

攫われたなんて言つてるけど、滅茶苦茶感謝している。

僕が僕らしくあれど世界に連れてきてもらつたのは良い事だ。それが例え全てを捨てなければならぬものだとしても、僕にとつて最良だった。

「これで科学技術が発展してたら文句ないのになあ」

「そんなに玄界の技術が良かつたの？」

「そうだね、科学は偉大な人間の歴史だよ。僕は科学者じゃないからあつさりとしか理解してないけどね」

色んな文献が無料で見れる現代、中々捨てがたいモノだ。知識を好き放題貪るのは平和の象徴。情報を管理でき、王に権利が集中するこの国に比べれば圧倒的に自由度が高い。

「数年後に玄界に接触か……」

楽しみだ。

何もかもが楽しみだ。言葉に言い表せない程の感情の昂ぶりだ。きつとその時、世界を越えて僕は愛を叫ぶ。誰かに対してか、概念に對してかは謎だけど何となく思うんだ。

楽しんで愉しんで——その果てに待つ真実の死。

虚空に墮ちるあの虚無感に感嘆を吐きながら死ねるだろうか？

「君も一緒に墮ちてみる？」

「あら、言わないと置いてくの？」

「僕は他人に押し付けはしないさ」

僕と同じ感性を持つ人間に会ったことは無い。

既に幾つか星を廻っているのにも関わらず見当たらぬといふ事は、そういう事だ。僕が異常者という事実はもう変わらない。でも寂しくはない。

どうしようも無い位に楽しいから。

「一人で死ぬのも一興だよ」

誰にも悟られず、ひつそりと息を引き取る。

それもまた良し。

未来は無数に存在して、僕はその選択権を無数に所持している。

素晴らしい事この上ない。我が人生は今が幸せの絶頂期ではないだろうか？

「逆に僕の事を追いかけてきてくれる?」

「さあ、それはどうでしよう。その時の貴方次第ね」「なるほど、ラブコールを謳えばいい訳か。見た目に反して情熱的だよね」

ミラはクールな女性である。

快活に笑うタイプではなく、口元を薄く変化させる程度。

感情豊かにボディランゲージを行う性格ではなく、手を叩いて笑うなどの行為も無し。

「愛を謳おうか?」

「問われてやるものじゃないでしよう」

「それもそうだ」

感動的に、衝動的に、情熱的に。

計画何て一つもないけど、なんとなくそう思う。

決断しなきゃいけないときは人生に於いて何度も存在する。

僕は既に一度決断をして、世界を越えた。

次もきっと存在する。

「さて、こうしちゃいられない。改善点は沢山ある、考える時間が足りないや」

トリオングルを利用すれば三大欲求も解消できたりしないかな。

食事を不要に、睡眠を不要に、性欲を不要に。人間的要素をどんどん消していくば僕はどうなるのだろうか。

アンドロイドのように精密になれるのか、それとも生きる意味を失つて愚鈍になるか。

僕のトリオングルと相談して、機能を積み込んでいこう。

強化トリガー、いい性能だ。

鎖を単品で扱うのは性能を殺しているな。

鎖そのものに副次的な効果を持たせた方がいいかも知れない。例えれば爆発する鎖にするとか。

アリだな。

僕の脳味噌の機能も弄つてみたいけど、そこを弄つたら元に戻れ無さそうだ。

せめて玄界ぐらいの科学技術が発展しないと厳しいね。

人体構造とか、殺しとかそこら辺は発達してるんだけどなあ。

「そう言えばアフトクラトルにもあの言葉はあるかい？」

「あの言葉？」

ふと頭の中に浮かんだ言葉だ。

「そろそろ、愛を謳うのに適してる言葉だ。詩的で華麗で、僕はとても

好きなんだよね」

月が綺麗ですね。

ああいう言葉を思いつける人間は素晴らしい教養を持つていると  
思う。僕は全てを台無しにする終末感とか、虚無感を好むが別に他が  
好きでは無いわけじゃない。

文学も好みの内だ。

「その内教えてあげるよ」

「あら、じゃあ楽しみにしているわ」

## アフトクラトル④

血液に塗れた手。

目の前で息絶えた見知らぬ人間。

何度も嗅いだ鉄のような香りが周囲に散らばって、それと一緒に顔にかかつた生暖かい液体。

「…………はは」

試合中に何度も嗅いだ。

僕はこの匂いが大好きだった。

落ち着いて、それでいて興奮して、昂つて。

血が出る痛み、それに付随する苦しみ、相手の感情に僕の感情。何もかもを複合して快楽へと変換する僕の狂った脳は人体を構成する全てが好きだった。

血が出る。

傷が深く肉が見え、白い骨に油が付着する。

そんな傷を負った男性が目の前で息絶えるのを見て、僕はどうしようもない程に興奮していた。

どうしてこんな事が起きたのか、そんな事は考えなかつた。  
僕の頭の中は正に革命。

そうだ。

——今なら殺したつて、バレやしない。



「それでは主だつた作戦を伝えるぞ」

「はいはい、よろしくね」

仄暗い室内、長机に表示された投影型ディスプレイを見る。

トリオンを利用して表示しているらしいが一体どういう技術なのか、鉱石類とかどうしてるのでだろうか。  
「作戦と言つても、トリオン兵を投入してトリガー使いが現れた所に

俺かエネドラを突っ込ませるだけだが

「ラービットで十分な気もするけどね。今回の作戦は敵トリガー使いの確保だよね？」

「ああ。俺もエネドラも捕縛向きではないからお前とラービットに確保を任せる」

殺しは無しか。

まあ仕方ない。別に殺さなくても恐怖を覚えた人間の顔は美しく嫌いからね。

「ん、んふ。おつと失礼」

「キメえから死ね」

「そんなこと言つたつて、君も人が喚いてる様子は好きだろ？」

「一緒にすんな」

まつたく、連携が取れるのか不安になつてくるね。

僕はエネドラをこんなにも親しい友人だと思つていて、どうやらエネドラからは負の感情しかやつてこない。玄界にいた頃にはこんな事なかつたんだけどなあ。

やつぱり社会的模範を務めなければ僕の人格は否定される立場にあるらしい。

「ハツハツハ、意外と仲良さそうだな」

「お前節穴か？」

「いやあ照れるね」

「失せろ」

ランバネイン曰く僕らは仲良く見えるらしい。

前言撤回、やはり僕はこのままでも上手くいける。ソースはランバネイン。

「チツ……さつさと送れ！」

「エネドラ話聞いてなかつたの？ ラービットが先だよ」

「るせえな！ お前と離れたいんだよ！」

「んつづ……！」

直接的な罵倒は中々に渋い。

ミラや陰険隊長は遠回しに喜ばせてくれるが、エネドラは違う。ス

トレートに真っ直ぐに、何処までも自分の感情のみ考えて発言してくれる。

その我儘さと直情的な表現は趣深いのだ。

「…………ふう」

「おいランバネイン、さつさと送れ。頼むから」

「まあ良いだろう。確保が優先だからあまり殺すなよ?」

「ハツ! 勝手に死ぬ雑魚が悪いだろが」

僕が感嘆と賢者になつてゐる間にエネドラは消えてしまつた。  
へえ、ミラのトリガー能力を少しだけ模倣できる機器があるのか。

それは便利だ。

「普段我々が別に行動することはないからな、念のための装置だ」「奪われる事でも想定してなけりや作らないもんね」

本家本元が万能だから作る理由がない。

「さて、僕も送つてくれない? 折角だし色々試したいんだけど」

「一応これを持つていけ。一方的に遠征艇まで、三秒間ゲートが開く」

そう言つて手渡された指輪。

男に指輪を渡されるのはなんだか複雑な気分になるんだけど、もしかしてランバネインはミラに直接手渡されたのか? もしそうなら嫉妬の炎を燃やさずにはいられない。

「了解。じやあ適度に確保してくるよ」

「気軽にやれ。どうせ本命は兄者が用意しているからな!」

「流石は領主サマ、用意周到だねえ」

元より捕縛が目的ではあるが、だからといつて期待してゐる訳ではない。

なんともわかりやすい根暗だ。

他者を心の底から信用することはないのだろう。究極的なまでの現実主義者というか、憶測を頼りにしない上の立場の人間としては鑑だ。

起動した装置を潜り、黒い円の向こう側へと辿り着く。

白いトリオン兵の残骸と、それを中心に此方を見ている複数の人影。

「……やれやれ」

僕は複数戦闘が得意じゃないんだけどな——これも領主サマの作戦かな?

「ま、平原とかに放り出されないだけマシだね」

事前情報と照らし合わせようか。

相対するのは合計五人、トリオン兵の残骸と住宅街。素材は不明だけど、少なくとも木材じやなさそうだ。強度がそれなりにあることを期待してもいいかな?

両方の掌から鎖を射出して、鎖を切り離して繋ぎ合わせる。

様子見に徹している相手は近づいてくる気配もないし、遠距離からの攻撃も無し。

多分エネドラが暴れまくったから不用意に近づくなつて警告が来てるんだろうな。そういう意味で切り込み隊長がいるのは安心する。僕がその役目を担いたい。愉しそうだ。

そうして軽く陣地形成を終えてから、声を出す。

「やあ、元気してる?」

友人に話しかけるような気軽さで。

僕からしてみれば全員友人みたいなものだ。全人類に友愛を持っている訳じやないけど、僕は全部を愛せるからね。

「……何が目的だ」

「返事をしたつて事は君がリーダーつて事で正解かな?」

有無を言わさず、アリシダを射出する。

エネドラとの戦いでは使わなかつたが、僕のアリシダは二つの要素に分けることができる。

一つ、鎖そのものの強度を補正する。

トリオンの消費量と比例して強度を上げられるアリシダは全力の硬さに変化させれば、ボルボロスで貫くことが出来ない程の硬さを得る。

もう一つ、射出する速度。

これはトリオンの消費量に関係ないんだけど、鎖の硬さを決めるのをリアルタイムで調整しなきやいけないから操作難易度が上昇する。

まだ使い始めて日が浅いから慣れてないんだけど——実戦なんだ、試すに限る。

速度を最大限に、硬さはそれなり。

流石に真正面から突破できるほどは容易くなく、周囲の人間によつて阻まれる。

「——いいね、楽しめそうだ」

「総員展開しろ！」

厳つい顔立ちの男が指示をする。

先手は僕から。

周囲に散らばつていく一人に向かつてアリシダを射出、さつきので最大速度に対応できる事は理解した。なので今回は速度をそのまま、硬さを先程以上に上げることにする。

僕のアリシダはこれしか無い代わりに、この基本をどれだけ使い分けられるかパターンを用意してるんだ。

強化トリガーの割に完成度が低い理由は、まあ……改造する前提だよね。

僕はよそ者で、故郷は玄界で、遠征部隊という実力者集団に入つてはいるがまだ信用足らない人間だ。だからこそ罪<sup>アリシダ</sup>の鎖なんてトリガーを渡されたんだろうな。

伸びていくアリシダに対し、攻撃を仕掛ける剣を持った男。

先程と同様に防げると判断したんだろうけど、それは甘い。

インパクトの寸前で手元を軽く動かして鎖を調節する。

連動して鎌部分が畝り剣に絡みつく。刀身部分に鎖が触れているが特に変化はなし、ただ切れるだけかな？

特殊な効果は無さそうだ。

「——ふふ」

そのまま引き寄せるように鎖を引き、男のバランスを崩す。

——トリオン体は通常の肉体の数倍の身体能力を持つ。

ただし、そこには個体差が出る。所詮は通常の肉体の延長線であり、元々超人的な能力を持つ人間がトリオン体を得た際どうなるのか？

アフトクラトルでは既に実証済みであつた。

「——なんだ、この力は……！」

「そら、剣を離さなくていいのかい？」

張り合おうとする男が僕と顔を見合わせる程の距離まで引き寄せられる。なるほど、これは弱いと評価される訳だ。

「得体の知れない相手に対し、不用意に近づくのはやめた方がいいよ」

そのまま男に鎌を突き刺し、アリシダで共有する。

捕まるならこれで終わりだ。もう彼は僕から逃げられないし、逃がすつもりもない。

「それ」

ブチリと、特に何の躊躇いもなく男の腕を引きちぎった。

「——ゾアッ……！」

「痛い？ 痛いよね、わかるよその気持ち。僕も痛いもん、苦しいよね」

この燃えるような灼熱。

切断された箇所が、言い表せないような温度に晒されてるこの感覚。火傷に火傷を重ね、凝縮された溶接を行われている様な熱。

「堪らないよねえ！」

そのまま鎌を掌に生み出したまま、射出する速度をほぼ無に設定して掌底を叩きつける。

格闘技ではあるが、武道と呼べる空手。

僕は空手の有段者だ。こう見えて幼い頃から神童なんて言われる程度には人体の壊し方は知つていて、理解している。

トリオン体を熟知した戦闘の経験値も積んでいるベテランが相手ならまだしも、素人同然の相手に負ける程弱くない。

「そらそらそらそらッ！」

腹をぶち抜き、腕を圧し折り、首を捻じ切り、頭蓋を碎く。

その痛みが男を通して僕に共有されて、心の奥底から喜色が滲み出る。笑みがこぼれて、痛みに顔を顰める。

「あははははっ！ いいね、君はどうだい!?」

トリオン体が解除された男をアリシダの鎖で巻き付けて端に投げ捨てる。まあ死なないだろ、次だ次。

男の様子がおかしい事に気が付いたのか、周りの奴が少しづつ距離を詰めてくる。

「飛び道具は無いのかい？ 人類が生き残つて来た唯一の手段を捨てるとは、これまた奇特な国だねえ」

既に展開済みの鎖に手をかけて、高所を取る。

射撃が無いと思わせての狙撃もあり得るけれど、ここでは心配しない事にする。僕の所にいる部隊がこれだけって事は多分本隊は壊滅してるだろ。

ラービット——莫大なトリオンと引き換えに作成された新型トリオン兵によつて蹂躪されたこの国は、ランバネインとエネドラに対抗する手段はない。主力がトリオン兵に勝てないのでから、それを上回る総合力を兼ね揃えた二人に勝つとは思えないね。

上に居る僕が隙を見せたと判断したのか、先に斬りこんでくる二人組。

多対一の絶対的優位をちゃんと使おうとしてるあたり先程の男よりはマシだけど動きが粗い。これじゃあアフトクラトルの尖兵にすらなれないねえ。

どうやつて生き残つて來たんだが——戦わないからこそ生き残れたのかもしれない。

腕を振りながら鎖を射出し、突如射程が伸びたかのような使い方をする。

横薙ぎに振るわれたそれは止められたとしても伸び続け、ぐるぐると二人を鎖で巻き付けた。

切り離し、接近してきていた隊長格と相対する。

振るわれる剣を受け流し、そのまま鎌を突き刺す。

悪くない動きだけど、こう……決め手に欠けてる。

痛みによつて興奮出来るけど、内心あまり楽しんでない。

弱すぎて話にならないのだ。

トリガーも、兵隊の練度も、殺し合いの密度も何もかも弱い。

命を奪い合わない空手のほうがよっぽど緊迫感があつて楽しかった。

隊長格の剣を折り、両腕を碎く。

苦悶に表情を歪めるのを見て僅かに悦びながら顔面を蹴り碎いた。

「あらう」

そういうしてゐ内にラービットが飛んできた。どうやら僕の場所まで援護に来れる程度には手が余つてゐるらしい。

残つていた一人を殴り飛ばして取り込んだラービットは再度飛び立つ。

呆然とする隊長を鎖で縛つて、その場に座り込む。

「……ふむ」

まあいいか。

遠征のチャンスは何度もある。僕はまだ寿命が来ないし、まだまだ強くなれる。それこそ最盛を迎えるのは数年後になるだろう。

その時に誰を敵にするのか。

「楽しみだなあ」

今を楽しんで、未来を楽しんで、何でもかんでも楽しんでしまおう。

「あ、そういうえば」

さつき縛つた中に女の子がいたな。

そう思いながら目をやると、もぞもぞと身体を動かしながら鎖を解こうとしている二人。

「君らはトリオン体壊れてないもんね——ならさ」

どれだけ壊しても壊れないよね?

良く見れば二人とも女の子だ。ランバネインには悪いけど、この娘たちは僕が個人で楽しむ様に確保させてもらおう。

「あ、あー。ランバネイン、聞こえてる?」

『——……聞こえてるぞ、どうした?』

「ラービット一体貸してくれない? キューブ化したほうがいいだらうし」

『わかつた。こつちももうすぐ終わるから先に船に帰つてもいいぞ』  
「了解、じゃあね」

鼻歌混じりに近づいて、警戒の仕草を解かない二人の太ももに鎌を突き刺す。

「僕のトリガーハンマーは特別仕様でね。僕以外扱える人間がいなんだ」

何に干渉するかを調節しながら、鎌を切り離す。

アフトクラトルは不要な恨みを買う事を良しとしないだろうけど、僕はアフトクラトルの事を想つて生きてる訳じゃ無いからね。そこはお互い様だよ。

「トリオン体に干渉して、わざわざ痛みが反映されるように改造した特別性。どういう事がわかるかな？」

「……痛みが？」

「そう、言い換えれば痛覚だ。トリオン体の良い所は痛覚遮断を行えて、部位欠損をしても作り直せば再度戦闘出来る事だ。メリットが無いと、そう思うよね」

どこか怯える様な表情の二人に、教鞭を揮う様にゆっくりと飲み込ませていく。

この段階が良いんだ。あり得ないモノを見るかのような表情に変化し、現実を目の当たりにして絶望と苦痛に歪むこの瞬間と行程。

「僕はね、痛いのが好きなんだ」

「痛いのが、好き……？」

「うん。被虐的で嗜虐的、君達に嬲られるのも嬲るのも好きなんだ」「ねえ、アリシダ」

トリガーの共有設定をオンにする。

今回共有するのは痛覚共有、僕の痛みと彼女達の痛みは三人分となつて襲い掛かる。

「——あああああッ！」

瞬間、轟く悲鳴。

う、ふ。ふふふ、ははは。ああ、でも、どれだけ弱くでも、これはこれで良い。酷く嗜虐的じやないか！

「はは、あははは！弱いね、弱いつて残念だねえ！」

ぐりぐりと太ももを鎌で抉り傷口を広げる。

正直トリオン体で痛みを反映できるようにしてから自傷しすぎて

ある程度慣れちゃったけど、それでも痛みは痛みで感じる。相変わらずの気持ち良さ、例えるならば丸まっている猫に顔を突っ込んで嗅ぐあの安心感。

「弱者を甚振るのも、強者に甚振られるのも、僕は大好物なんだ」

でも、やはり弱いのはつまらない。

少し手を加えただけで動かなくなつてしまふ。この虚無感も好きだけど、長い間楽しめる方が好きだ。

余韻に浸りながら二人の少女を足蹴にしているとラービットが飛んでくる。二人をキューブ化させ、生身の二人もそのまま中に収納させた。

「…………ふう…………」

今回は殺しまわれるような戦場じやなかつた。

如何に弱くても、トリオン社会では使い道がある。永遠にトリオンを抽出するためだけに生き永らえさせるとか、税金の代わりにトリオンを提出させて農民として働かせるとか。向こうが死にたいと自死を願える程に文化的ならちよつと難しいけどね。

まあ、そうでもないと僕のような人格破綻してる人間は扱つてもらえない。

ある程度言う事聞いて、ある程度優秀である人材。

だからこそ遠征何て大事なポジションに置かれている訳で、彼らみたいな、言葉は悪いが雑魚では話にならないだろう。

「…………くく」

墮ちた星特有の暗闇が広がっていくのを見届けながら、僕はワープゲートを起動する。

ここにはいない彼女の香り<sup>ミラ</sup>がしたような気がして、僅かに昂つた。

## アフトクラトル⑤

「——トリガー使い」十人、金の卵とまではいかないがそこそこが数人。未知の、かなり低レベルではあるがトリガー技術か……アフトクラトル遠征報告会、と言つても我らが領主に報告をしいるだけに過ぎない。

領主ハイレイン、ランバネインの兄であり黒トリガーの使い手である。

ミラからは「思慮深い」、ランバネインからは「念密な根回し」、エネドラからは「陰湿で陰険」と表現される彼はある意味で平和主義者と呼べるかもしれない。

「二人程貰いたいのが居るんですけどいいですか？」

「…………ランバネイン、黙らせろ」

「ガハハ、まあまあ兄者。俺はそろそろ信用してやつてもいいと思うがな」

おかしいな、僕の味方が全然いない。

親友エネドラは消えた、ミラは無言、初めて会う幼めの少年は俺のことを睨んでる。

「いいじやないですかあ、アフトに来てから全然楽しんでないんですよ。エネドラと戦うのも緊張感あつていいけどたまには嗜虐的な方向でも満たしたいし、ミラが相手をしてくれるならいいんですけど「させるわけがないだろう。貴重な黒トリガー使いだ」

「ですよねー。だから今回捕まえた人間の中で適度に弱くて適度にいじめ甲斐のある娘達を見つけたので、それが欲しいです」

発言内容がカスすぎないか？

我ながらどうかと思う内容だ。現に初対面の少年に死ぬほど睨まれてる。

「君は要る？」

「ヒュース、気にしなくていい。害のある奴だがそれなりに優秀だ」

「そこは問題はあるが害はないっていうパターンじゃないんですか？」

「自覚してるだろう」

それはもう。

「ふー……まあ、いや……一日待て。そうしたら結論を出す」

「一応考えてはくれるんですねえ」

「相手の実力が低いとはいえ不利な状況で勝ったのも事実だ。そこは評価する」

驚いた。

軍人だから戦つて勝つのは当たり前、そういう価値観があるわけじゃないのか。

そもそも率いるトップと気軽に顔を合わせられる時点でそれなりにフレンドリーだな、そこを考慮してなかつた。

まだまだトリオン文化には疎いままだなあ。

「それで、この子は？ 初めて顔を合わせるんですけど」

「……俺はヒュース。初対面で悪いが、俺はあまりお前と話したくな

い」

「んうつ……なるほど。愉快な子だ」

いきなりの拒絶は興奮するから勘弁して欲しい。

「僕はクライム。玄界出身だよ、よろしくね」

「玄界……？ どういうことだ」

「数年前に攫われて、それなりにトリオンがあつたから馴染んだ。そしてここに拾われた」

「性根は拾う前から腐つてる。深入りするなよ」

「本人の前で言います？ それ」

「何を言つても意味がないだろう」

「ふふ、僕の解釈満点です」

「退出しろ」

「いい返事を待つてますね、ハイレイン隊長」

ニコニコ笑顔で退出する。

いやあ実りのあるいい会話だつた。頭空っぽにして脊髄で会話するのもいいが、たまには実用的な会話をするべき。脳のマッサージにもなる。

「あー、あの娘達貰えないかなあ」

僕が今住んでるのは城から少し離れた家で、用事がある時だけここに来る形だ。

主な客はミラ。

普通の一軒家だし、現代で考えればとても得のする話だ。

二階建て一軒家、一人暮らし税金なし。農民達と違つて僕は好きなことだけしていれば強くなるので怒られないし、飯も無料で食える。いやあ天職すぎるな。

でも一人暮らしも飽きてきた。

遠征がない時とか暇すぎて何もいえない。飯を食う、トリガーを考える、トリオンを増やすためにひたすらアリシダを射出する、トリオング体のデザインを考える……結構いろいろやってるな。

アフトの中でトップクラスの実力者とたまに遊んでもらうんだけど一度も勝てずにボコボコにされてる。

それはそれで楽しいけど、やつぱり痛めつける側にも回りたい。

苦悶の表情を浮かべて泣き喚く姿はどうしようもなく興奮する。性的興奮とも言えるし、もつと別の感情に変換していると思う。

「やつぱり家に帰つたら『飯作つてる人がいるってのはいいよね』  
うーん、やつぱり欲しいなあ。

なんでも言うこと聞く様な性格でもいいし、逆に反骨精神がすごい娘でも良い。なんもあり、オールマイティに対応している。主に僕が。

凄惨で陰鬱とした殺し合いを終えて疲労困憊な僕を出迎える女の子、お風呂にしますかご飯にしますかそれとも私？ 僕はそれに笑顔で答える。

「勿論君さ、今日も寝かさないよ——あ、やっぱ興奮してきた」

「おい見ろよ、また教導官一人で笑つてるぜ」  
「こわ……」

コソコソ話してる教え子は放つておいて、僕は一人夢見心地で歩く。

また一から色々仕込んでもいいし純粋無垢でもいい。トリオン社

会にとつて彼女らは大切な人材ではないが、僕にとつて彼女達は必要な人材だ。

ハイレイン領主的にはどうかな。

僕に二人を渡すリスクとリターンを考えれば渡すかどうか五分つて所か。

もうちよつと権利があればなあ、トリガーホーン<sup>ホーン</sup>角を彼女達に生やすとかできるんだけど……僕にその権利はない。

貴重なトリオン研究資材を使用するには、ちゃんとした成果を上げなければならぬ。

まあアリシダの開発時にある程度の成果は提出してるからそこと交換して二人を貰えればいいか。



翌日、呼び出されてやつてきた城。

「この一人で間違いないかしら」

そう言うミラの後ろには手錠で手足を繋がれた女の子が二人。服はちゃんと着せてるのがまだマトモに感じるね。

僕が最初攫われた場所はトリオン少ない人達が非人間扱いされたからなあ。

「うん、間違いないよ。よくわかつたね」

「一番貴方に嫌悪感を持つ娘を探していたらこうなつたわ」「なるほど、納得した」

ツインテールの娘と、ポニー<sup>ホーン</sup>テールの娘。

もしかしながらこれ姉妹かな。顔立ちも似てるし、結構かわいい。

「名前は？」

「……アロエ」

「可愛い名前だ。そつちの娘は？」

「……エリカ」

アロエとエリカか。

これはまた随分と皮肉なもんだな。

「君達にピツタリだね」

玄界出身つて訳でも無さそうだし偶然ではあると思うけど、今の君達にはピツタリだ。

そのうち教えてあげようか。

「アロエとエリカね。今二人とも何歳?」

「……15」

「17歳よ」

わお、未成年。

圧倒的未成年、玄界でやつたら犯罪だね。パパ活とかそう言う次元じゃない大事件だよ。

アロエ17歳、エリカ15歳。

高校二年、中学三年とかそこらへんか。僕の思い出の中にある幼馴染みがこれくらいの年齢だったなあ。ヤバいやばい、興奮してくる。まだ抑えよう。

「僕はクライム。痛いのが大好きで、痛めつけるのも大好きで、喜ぶのも好きで、喜ばれるのも好き。他人も自分も全部快樂になっちゃうんだ」

「哀れね」

「僕が?」

「いいえ、この娘達が。あなたは哀れんでも悦ぶでしょう」

流石ミラ。

僕のことによく理解しているね。

「安心しなよ、僕は高給取りみたいなもんだから。この国じやそこそこのエリートだよ? ……多分」

「生活の心配はしないわ。人格の心配をしているの」

「そつか、なら大丈夫。きっと育つよ」

「捻じ曲がった方向に?」

「そんな大昔の話じゃあるましい、僕好みの女の子を育てるのも――

それはそれで一興だけど」

二人の僕を見る視線が負の方向へとどんどん墮していく。

嫌悪感、懷疑心、疑いと不安と切なる感情がまとめて僕へと突き刺さる。この二人は余程僕のことを喜ばせたいみたいだ。

「いいね……」

「いいよ。

すごくいい。

「僕好みで安心した。これからヨロシクね、二人とも」  
差し出した手が受け取られる事は、なかつた。

「さ、ここが君たちの新しい家だよ」

僕が暮らす家に連れてきて、手錠を外す。

奴隸的な扱いをしてもいいんだけど、初めて年下の女の子と暮らすのにそんな扱いしてもな……と言う所存。折角だから仲睦まじく暮らしていきたい。

「部屋割りとか何処が良い？ 二階は基本使つてないけど」「なら二階がいいです」

「理由は？」

「あなたが居ない場所が良い」「じゃあここにはないね」

「…………」

眉間に皺を寄せて渋るアロエ。

主体的なのは姉、かな。

片方だけ甚振つて片方に優しくして、これすると仲間割れが起きたりして負の感情面でニヤニヤ出来るんだけど序盤にそれをやるのはね。やるとすれば慣れてきた辺りかな？

対照的に妹のエリカは大人しく、手錠を外されても髪を少し揺らす程度で済ませている。

「まあまあ、そう警戒しないでよ。僕は悪辣な精神性をしている自負があるけど、それと同時に人道的な面も兼ねていてるからね。空気を味わい、華を撫で、陽を拌む。それくらいの感性は持ち合わせてるよ？」「あんなことした人を信用出来る訳ないでしょっ！」

「あんなことつて……ああ、アリシダで共有した奴？　あれくらいは挨拶だよもう」

大袈裟だなあ、そう言つてから息を吐く。

トリオン社会に生きる人間は、痛みに弱い。正確には戦意が高く士気も高いのに何故か死ぬだけで済むと思っているのだ。

戦争を常に続いている人材は違うが、国に所属し軍隊としてただ生きているだけのヤツ。

コイツが厄介で、簡単に殺してもらえると思つてる。

「そうだねえ。世間一般、発展した人類としての見解なら僕は異常だ。狂つていて外れていて、どうしようもない位に屑。だけどね」

アロエの頸に手を添えて、無理矢理視線を合わせながら話す。

「僕は理解できた。自分の事を、社会の事を、全部全部全部ぜーんぶ。個は殺し、群に生きた。出来るだけその輪を乱さず自分を満たしてきたんだ。これがどういう事かわかる？」

僅かに僕を睨む瞳を嘲る様に、身体をそつと引き寄せる。  
細い身体だ。

骨も厚くない、されど女性特有の柔らかさが実りはじめている。脂肪の膨らみ、甘温い香り。彼女<sup>ミラ</sup>とは少し違った個人差に興奮を示しつつ、まだ男を知らない未熟を撫でつける。

降り積もった新雪を汚すとき。

張つたばかりのキヤンパスに一筆入れるとき。

『初めて』を汚すのは、なんだつて興奮する。

「君はどうかな？」

世間一般、『普通』の人間か。

それとも僕と同じ、『異常』か。

接吻を交わす距離感で、星間程に離れた心を。

## 百合と共に①

左手側に大人しく佇む茜色の髪を一つに束ねた幼さの残る少女。僕が肩越しに回した手が彼女の頬を撫でつけ、年頃の柔らかさを堪能する。男に触れられる事など無かつたろうに、僅かに身を震わせているその姿が愛おしい。

「……やめてください」

「えー、どうしようかな。アロエはご飯作つてんしねえ」

「…………」

ちよつとだけ反抗の姿勢を見せて、僕の言葉から意味を読み取つて黙る。

あんまり期待してなかつたんだけど掘り出し物だ。

この姉妹は頭の回転も良く柔軟で聰い。

今のは複数の意味がある。

順を追つて味わうならば、まず一つ。

・反抗の姿勢を見せたのは『僕がどう言えば喜ぶか考えた結果』である。

ここ数日共に過ごした事で僕が真正の屑だと理解したんだろう。

暴力的にも性的にも手を出されてないが、まだ揶揄う程度で済まさっている。それは何故かを考えて、一先ずこれ以上悪化させない為に現状で満足させることにした。

僕を満足させるには、僕の要望を聞かなければいけない。

でも僕は自分から全部を要求してる訳じや無い。

アロエの身体を触つたり、エリカの身体を触つたり、口で罵つたり色々試しているだけだ。

だから取り敢えず僕の性質を理解して、それに則つて行動しているわけだ。

長く語つたが結論を述べると、『反抗的な姿勢を見せつつ従順で居ればいい』と判断したわけだ。

そして先程の会話、『やめてください』と嫌がる姿勢を見せつつ僕の反応を伺っていた。

僕は『どつちとも取れる』発言をしたから彼女は黙った。

その、『黙る』という行動まで悦ばせると理解したうえで。

「君は賢いのに、あんなに弱いのはかわいそうだねえ」

「……余計なお世話です」

「ハハハ、言うじゃないか。でも此処での暮らしの方が清潔だろ？」

「あなたは、私の家族じゃない」

「家族が幸せに繋がると言うのは未発達な文化の証明さ。現に僕は家族が居ないけど満足に生きていて、家族が居た君達が不幸に見舞われている」

まあ、別に玄界での暮らしに不満があつた訳じや無いんだけどね。

それは言わなくていいや。

「自分の視点でのみモノを語るのは良くないよ」

「――ごはん、出来ましたからっ！」

「おつと、ありがとうねアロエ」

ゴスンと音を立てて机に置かれた料理に手を付ける。

エリカが居る方途は逆、つまり僕を挟むようにして椅子に座つた二人も同じように料理を口に運び始めた。

「なんか百合の間に挟まれてるみたいだなあ」

「事実です」

「そういうの否定されがちじやない？ 硬派な人はそういう事言うよね、僕は興奮出来れば何でもいいけど」

「…………キモ」

百合とは抽象的な言葉であり、僕の故郷では女性同士での絡み合いの事を指していた。

まあ姉妹の間に入り込むのも母娘の間に入り込むのも僕が得をするからいいんだけど、よくインターネットで争いをしている人はいた。

やれ百合がどうだの純愛がどうだの寝取り寝取られがどうだの。

僕は全部興奮するから全部肯定するけどね。

「彼氏が出来たら教えて？」

「なんですよ」

「え、寝取るから」

「最低すぎませんか？」

「逆に僕から寝取られてもいい。それはそれで興奮するから推奨するよ」

「いや、そもそも身を許してません」

「本当？ ジャあこれから許してもらおうかな」

「え——」

食事中のエリカの腕を押さえつけて、そのまま顔を近づける。

一応抵抗するために力は入れているけど、必死さがない。内心諦めてはいるんだろうね、現実に。

折れた心をズタズタに引き裂くのもそれはそれでいいんだけど——絶望つてのは緩急があるからいいんだ。

「…………しないんですか？」

「気が向いたらね」

手を放してそのまま食事を続ける。

完全に死んだ目をするエリカを無理矢理やるのも楽しめるけど、どうせならそこから立ち直らせて——もう一度折る。廢人になるくらい、もう人間として再起できなくくらいに使い古した雑巾の如く。

「ほらほら二人とも、早く食べな

ある程度の自由を許されているとはいえた本質的に囚われている事に変わりはない。

僕のような世間一般で言えばサイコパスと同じ家で暮らすのはそれはさぞかしストレスになるだろう。いつ手を出してくるか分からず、殺されるかもしれないし女として辱められる可能性もある。

けれど気丈に、現実を諦めていてもまだ自我を保つ。

そういう姿を見るだけでも興奮出来る。いやあ、遠征で捕まえてよかつた。

「んふ、ふふんふふふ」

「…………」

「一人で笑うのをスルーされるのもいいんだけどさ、僕は共に笑つて

くれる人も欲しいんだよね。この国で唯一笑ってくれるのミラだし」食べ終えた皿を持つて、そのままキッチンへと向かう。  
どうするかなあ。

手を出そうにもまだ子供。

大人と子供の境目の異性に手を出すのはそれはそれでいいんだけど、前の国で遊んでたからな。味は知ってる。  
性的欲求は最近満たせてるからもう少しこう、やはり、違う方向での欲求を満たしたいね。

そこまで考えて、少しだけ思いついた。

これは非常に合理的で無駄が無く、何をとっても得が生まれる。  
リビングでちまちま飯を食つてる二人の間に再度挟まつて、一言告げる。

「ね、強くなりたい？」

「……何を企んでんのよ」

「え、アロエちゃんわかんない？ エリカは分かつてそうだけど」

笑いながら話しかける。

トレードマークの髪の毛だけは崩さないようで、エリカは一つに束ねた髪を揺らしながら僕の顔を見る。アロエも側頭部で纏めたツイントールを揺らしながら、僕のことを見る。

「強くならなきやいけないのはわかつてるでしょ」

この子達は未来がない。

未来を手に入れるまでに守ってくれる親は既に無力、彼女ら姉妹二人でどうにか生きていかなければいけない。僕の庇護下に入る？  
こんなサイコパスの下に？

その選択肢だけは取らないだろう。

「……私達が反抗するとは思わないんですか？」

「別に反抗してもいいと思うけどなあ、僕故郷玄界だしだ——それに、君  
ら弱いもん。二対一でも負けないさ」

そう、この方法なら僕らは互いに利点があるので。

彼女らは強くなることができて、僕は戦える相手が増える。

しかも中途半端にしか育たなくとも問題ないし殺しても文句はあ

まり言われない、幾らでも実験に使える貴重な人間だ。

「強くなれそうだつたらトリガー角だつて付けてあげるよ。どうかな？」

提示はしているが実質一択。

間にいる僕を無視するように顔を見合させた姉妹は僅かな間逡巡する様子を見せて、頷いた。

「…………受けます」

「受ける？ 何を？」

「つ……お願いします、強くしてください」

エリカの一瞬の苛立ちと、それを隠すような無表情に悦を感じながら僕はにつこりと笑顔を作る。

頭を下げたまま動かないエリカの頭を撫でながら、振り向いてアロエの顔を見た。

「君は？」

「……ほんつ……とーに……性格が悪い……！」

「あれあれ？ そんな態度で良いのかな～？」

エリカの髪を引っ張つて、顔を近付ける。

僅かな動搖が瞳で揺れる最中に、思い切り平手打ちを放つた。

「やめてっ!!」

「じゃあ早く言いなよ。どつちがいい？ つてわざわざ選択肢上げてるんだからさ」

「…………絶対、絶対、絶対に……許さないから」

「あはは、臨むところだよ。君らじやまだ楽しめないからなあ」

はあ、楽しい。

口で煽つて、暴力で嬲つて、好き勝手やつて。相手の悪感情も僕の感情も全部全部ぜーんぶ快樂につながる。

こんな勝手を玄界でやつていたらどうなつただろうか？ 幼馴染みで、僕を■■■■と慕つてくれた彼女はどんな顔をするのだろうか？ 絶望するかな、それとも信じられないと困惑するかな。「ごめんね、痛くない？」

「平気です……」

「良い子だ。アロエも見習いなよ？」

ケラケラ嗤つて侮辱する。

怒りに身を支配されても逆らえない、ああ、なんていい文明なんだ。  
法律はあるが僕はトリガー使いとして高い適性を持ち、その法のもと  
に守られている。

「いつか逆らえるようになれると良いね」

そこまで彼女達が生き残れるかどうかは、僕に知る術はない。